

『八郎』研究

——永遠性の実態——

大久保 みどり

はじめに

人は誰でも、その心に永遠を思う思いをもっている。

古今東西、芸術、非芸術を問わず、あらゆる作品や活動を通して、人々は永遠を追求して来た。本人は、正面切って「永遠を求めています。」とはいわなくても、何気ない日常茶飯事の生活の中で求め続け、それによつて満たされようと願つて来たのである。それは巷にあふれる歌や読みもの、暮らし振りをちよつと眺めるだけですぐ解る。「永遠の愛」、「永遠の真実」、「変わらぬ心」等、永遠を願うことが如何に多く氾濫していることか。永遠ということの意味や実体が解らずとも、そのことばに憧れ希望をたくし続けて来たのである。

一般に「永遠」は、時間的に長く続くことのように考えられている。勿論そういう時間性も含むが、何もないものが時間的に長く続くことはあり得ない。永遠という概念は、存在と相俟つて初めて意味をもつものである。

では、存在とは何か、それは可視・不可視を問わず形をもつものである。形をもたないものは単なる心の作りものに過ぎない。それ故存在は、

まず形、つまり唯一、絶体、不変、普遍性等を有する形をもつことを希求する。それが存続するために時間の永遠性をも希求するのである。いしかえれば存在は、形（原則）と時間とによつて成立するものと言える。こういう存在を求めることを永遠を求めるという。それが善の形か悪の形かは別問題である。

しかし、例えばどうしようもないエゴに満ちた愛が永遠に続いたり、苦しみと絶望のどん底生活が永遠に続くことは誰でもが願ひ下げる筈である。だから、人々が何かしら思わずにはいられない永遠とは、時間的な概念よりも、むしろ、その「愛」や、「真実」等の実態（存在の形）の方に重点を置いていと言えよう。最高（善）の本質（形）をそなえた愛や真実が永遠に続いて欲しいと願うのである。

『八郎』は、実に多様な命題を提起した作品である。その原因は主人公八郎の死に方にある。

八郎は人のために死ぬことは、自分が生きることだという原則を発見するわけであるが、その際、死に勝利するという方法をとつたために、色んな解釈を呼び起こした。

「『のために』というこの原則が、死の在り方如何によつては、単なる忍従的な自己犠牲や献身に終るか、それとも人間の生の発見、ひいては八郎の自己発見・自己確立につながるかの瀬戸際にたたされたのである。今日、その原因がどこにあるのかは、明らかにされていない。

そこで本論は、八郎の死に焦点をあてて、八郎が何のために、どういう敵と戦つて、どういう方法で死に勝利をしたのか、それによつて得た、生の永遠性の実態がどんなものかについて明らかにしてみたい。

一、何のために

わかったあ！ おらが、なしていままで、おつきくおつきくなりたかったか！ おらは、こうしておつきくおつきくなつて、こうして、みんなのためになりたかったんだ、んでねが、わらしこ！

これは、八郎がわらしこや村人を嵐から救うために、海と揉み合つて、ついに自分の死をも賭けようと決心した瞬間に発したことばである。この個所から「しのために」がもつ三種類の意味を引き出すことができる。

第一は、いうまでもなく、字義通り皆のため、他人の益のために死んだのである。

しかし、「わかったあ！」という第一声に注目すれば、犠牲や献身性の意味は、大部分影が薄くなってくる。その叫びが大きければ大きいほど、八郎が得たかったものは、人のために生きるということよりも、むしろ、自分が何のために大きくなりたかったのか、その疑問を解決し、答えを欲していたのだということが明らかにされる。この疑問は、人間存在の根源にさかのぼるものである。

人間は、誰でも心に永遠を思う思いをもっている。完全に充足されたい、不動のものを得たいという願ひである。八郎が寝ても醒めてももっていた、大きくなりた、大きくなりたという飢え渇き、このどこからか知らない湧きあがつてくるダイナマイトのような欲求は、自分の生を充足してくれるものが何か、知りたいということだったのである。そ

れ故、人間が一番恐れを感じる死の極限状態のまっただ中にあつても、死の恐怖などものともせず、歓喜に満ちて、「わかったあ！」と叫べたのである。

ここで八郎は、生の在り方を発見した。これが第二の「ために」の意味である。つまり、八郎本人の生の発見と充足のためにも八郎は死んだのである。

第三の意味は、八郎が最初から人のために生きる道は何かと捜していた訳ではないところに注目すれば明らかにされる。

つまり最初から生きる方法を求めていたのでないとなれば、作者がここで主張したかったものは、方法そのものではなく、むしろそれを明確に掴み実現することがどんなに素晴らしいかということである。

それは、「うんでねが、わらしこ！」ということばから伺える。「水が首から鼻まできて」今にも死のうとしている人間が、「わかったあ！」と叫ぶだけでも常人にあるまじきことばなのに、わざわざ「うんでねが、わらしこ！」と何もわからぬ筈のわらしこに同意までもとめた。これは一体何を意味するのだろうか、それを考えてみると、まず、八郎が海に入る動機となったものは、わらしこの村人を思うやさしさであつた。それは八郎が小鳥を思うやさしさと同質のものである。このわらしこの胸に燃えていた炎が、山男八郎の胸にもえていた炎に出合つたからこそ、八郎は海に入つていったのである。そしてついにその炎は、あら波も死も完全に焼き尽くしてしまうほどの勢いを得て燃え上がった。

その炎は、八郎一人のものではなく、わらしこのものでもあつた。だから、わらしこに向けて自分の感動を伝え同意をうながさずにはいられ

なかったのである。

④「やさしささえあれば、人間、やらなきゃならねえことは、きつとやるもんだ。」

「見ろ、このオレの身体を焼け焦がすやさしさの感動を、生きるってことはこういうもんだぞノうんでねが、わらしこ」というほどの意味であつたろうか。

西も東も解らない小さなわらしこだけれども、やさしさはもっていた。八郎はこのやさしさに、この感動を伝え、同意を得たかったのである。

作者が、今わの際に自分の死に様をみつめ同意をうながす等、常人にはあるまじき主人公を登場させた心意気は、このやさしさに点火されて、初めて発見できる、生の原則と、それを体現することの素晴らしさを主張するためであつたのである。

斎藤隆介は、こういう生き方を芸術的な生き方だと評している。それを子供の感想を用いて説明している。

⑤指導者の先生が、子どもに「どこがよかった?」ってたずねましたら、「ピチピチ、チイチイ、チュクチュク、カッコー」というところが、おもしろかったというのです。最初の発言ですから、先生が「ああそうですか?次は」っていったら、また、「ピチピチ、チイチイ、チュクチュク、カッコー」なんですよ。(中略)しかし、そこで先生のほうとしては、「ピチピチ、チイチイ、チュクチュク、カッコー」が三人続いたら、いらいらしてきてね。(中略)「いや、八郎はみんなのために、命をすてたところがいいんでしょ」なんてね、

(中略)先生が「そうでしょ」って言うと、子どもたちは、「はい」というんですよ。そこでまた「それじゃ、あなた」と指名しますと、「ピチピチ、チイチイ、チュクチュク、カッコー」

自分をすてて、みんなのためにつくすというとは、たいへんりっぱなだけれども、それが、芸術的な状況のなかではいつていかなかったら、それはお説教だと思ふんです。ところがその「ピチピチ、チイチイ、チュクチュク、カッコー」ということは、子どもなりに、そこから芸術的なものをうけとつてくれたんだ。やわらかいものをうけとつて、そういうなかで、八郎が命をすてるということに、子どもたちは感動をして、おぼえてしまい、「おもしろい」といつてくれてるんだろう、とわたしは考えたわけです。

献身や自己確立など、どこ吹く風とばかり、子どもたちは「ピチピチ、チイチイ、チュクチュク、カッコー」だけに手を叩いて喜こんでいる。これでは、先生としては如何とも胸がおさまらないのは当然である。

しかし、斎藤隆介は、それでいい、子どもの方が、八郎の芸術的な生き様、死に様を読みとつているというのである。子供の読みに対して信頼し過ぎの面もあるが、何故献身の美を読解させようとはらはらす先生を横目に、そう落ちついて言い切れたのか、それを探れば、斎藤が原則よりも原則を発見し体現することの感動に、より主眼を置いていたことが一層明らかにされる。

登場者の中で八郎と終始行動を共にしていたものは小鳥たちだけである。八郎が目覚まして海に駆けて行く時も、山を海にぶちまけ、波と

戦う時も、いつも一緒だった。飛び立ちはしても逃げ去ることはなかった。それは、八郎が海の底に消える瞬間まで続けられる。こんなに激しく活動する八郎の頭ほど巢に適さない場所もない。なのに何故小鳥たちは飛び去って行かなかったのか、それは、八郎が小さな小鳥をもいつくしむやさしさをもっていたからである。

八郎は

すぐまたおつきくなりたぐなつてよ、はまさかけおりたくなるとも、まんつ、小鳥めらがめんこくて、がまんしてらと。

八郎が人生の原則をつかむ原動力となったものは、小さな小鳥たちを驚かすことさえじつと我慢するやさしさであった。大きな身体の底からムクムクと湧きあがってくる自分の欲望を懸命におさえようとするナイーブで鋭敏なやさしさである。この小さな小鳥を大切に思うやさしさは、小さなわらしこの涙を、大きな身体でしっかり受けとる程のやさしさへ、更に、村人全体のために、生命を惜しげもなく捨てるやさしさへと、段階を追って燃えあがって行く。八郎の後をつけて行く小鳥の動きは、即ち、八郎のやさしさが、瞬時も途絶えることなくずっと流れ続け、八郎の全行動の基盤になっていることを証明しているのである。

だから、小鳥たちは、自分たちの巢が大揺れに揺れて、度肝を抜かれ、気も動転しそうな目にあわされても「ピチピチ、チイチイ、チュクチュク、カッコー」と飛び交って八郎の後を慕って行く。あたかも、八郎は決して自分たちを振り飛ばさないと知っているかのようである。その愛

らしさは、八郎の男らしく荒々しい行動に根底から、やさしさ、ナイーブさを深く印象づけ、読者に大きな安心感を与える役割を果たしている。それによって、自己犠牲や献身がকাশし出す悲愴さは、全く消されてしまふ。

「ピチピチ、チイチイ、チュクチュク、カッコー」という小鳥の泣き声は、八郎の生き様、死に様にとつてむしろなくてはならないもの、その本質を如実にあらわしているものといえよう。

人のために生きることには自分のために生きることだから、どうしてもその原則通りに生きなければならぬという。原則の前の窮屈さや、そうすることが善いことだと解かっている、わたしには出来ないという恐れや劣等感等、一切を飛び越えて、ただ、豊かな感動に身を任かせる生き様、隆介はこれを芸術的な死と生の姿と称した。

小鳥の泣き声にしか興味を示さない子供の読みの方が正しいと喝破し得た理由はここにある。

君の①いう通り、「八郎が村人のために高波を防いで八郎潟に沈んだことが大切だ」つていうのはほんとうだ。

だけどね、ただそれだけじゃ「お修身」だぜ。小鳥の泣き声が美しいと思ひ、その小鳥を髪の中に住ませてやって朝もソーッと起きる八郎をやさしい大男だなあ、と感じ、その八郎が皆のために死ぬからグツとくるんだよ。

「お修身」や「道徳」でなく、美しさや喜びを感じて魂の底からほんとうにみんなのため、働いたり、たたかったり出来るようになる

のが、ぼくは、ほんとうだと思うのだ。

こうしてみると、八郎が、生の原則に生きる歓喜を訴えたかったということは、裏をかえせば、八郎の死は、そういう感動があることさえ知らない人々に、こんな素晴らしい原則と感動があることを示して見せる、そういうためだったということになるのである。

だから、八郎の死は、藤田^⑤のぼるのいうように、生を粗末にしている人々へ、叱咤激励のメッセージを送ることになるのである。

以上「ゝのために」ということばの中に込められた意味を引き出して来た訳であるが、どの三点をとつても素晴らしい。しかし、作品分析から、特に作者が主張したかったものが、第二・第三の意であることに注目すれば、八郎の敵の正体が自から明らかにされる

二、敵

この作品の中で海に代表されるものは何か、民衆の生活を脅かす政治や特権階級や搾取者たちであろうか、それが真の敵か否かは、八郎が獲得した大きな意味を見れば明らかにされる。

最初八郎は大きくなりたいたいという願いが何故起ってくるのかその原因・目的・方法など、何も意識しないでいた。ただ盲目的に大きくなりたいと願っているだけであつたが、その願いは村人を現況から助けるものとなつたばかりでなく、計らずも真の生を発見し、自己を確立した。しかもその力は村全体（社会全体）に及んだだけではなく、わらしこの

心をも動かして、八郎と同じ生き様をさせ、更には、この話を聞いた後世の人々の心をも感動させるものとなつたのである。作者は、八郎の大きさにこれ程の意味を与えた。こういう大きさを獲得しなければ生の充足を得ることはできないとしたのである。

それ故、八郎の敵は、荒れ狂う海そのものではなく、こういう大きさをもちないばかりか、大きくなりたいという願い等いぞもたない者ということになる。つまり、自分に湧きあがつてくる生への本能的な欲求や、わらしこという小さな一人の人間の尊さ、そして社会全体、更に歴史をも含む人類に目を向けないこと、それが敵の正体だといふのである。

従つて、八郎は実際には海を敵として戦うのであるが、海そのものに對しては、実は何の批判も評価もしていない。むしろ、自分の座に安住しようとする山に向つて怒りを発しているのである。

海のやつはおこつて、さみいさみい風^{かぜ}こを、びゅーつ、びゅーつて、ふきつけたもんでな、八郎^{はちろう}のせなかで、山^{やま}は、「はちろおー、おらさみい、おらさみい」つて、がたがた、がたがたふるつたと。

したども、八郎^{はちろう}はな、

「だまつてれ、やがましゝわらしこないたれば、かわいそうでねがゝ」つて、その山^{やま}こ、海^{うみ}の中^{なか}さ、やあーつゝつて、ほうつたとせ。

これに對して佐藤通雅は、「かくまでに情のもらい八郎が、（中略）ガタガタふるえる山をなぜに海に入れることが出来たのか」と疑問を發している。「かくまで情にもらい」とは、八郎がわらしこのふりとばす涙

を見て、石臼みてえだ涙を一粒ポロリとこぼすほどに情にもろいという意味であるが、これは単なる情のもろさ故の涙ではない。八郎が小さなわらしこが、自分の身体をはち切れんばかりに震わせ、涙をふりとばして村人のことを思うやさしさに出会って、一瞬我を見出した瞬間のものである。八郎がこの時に流した涙は、大きくなりたかった原因と目的をつかみはじめた、大切な一粒であると同時に、自分の戦うべき敵の正体をはっきり認識し始めた時でもある。

だから、八郎の本当の敵は海ではなく、無目的、無方向に爆発する自分の生本能と、更には、このわらしこの涙に何の反応も示さない山に象徴されるプチブル性なのである。八郎にとって山の存在自体は勿論わらしこ同様に尊いものであるが、そのプチブル性は排すべきものである。それ故、ガタガタふるえていやがる山をこそ、海にほうり込んだのである。

④ いまの時代は、労働者も農民も、中流階級もそのプチブル意識が、最大のガンだと思うんです。子どもも、おとなも全部、そのプチブル意識に毒されていると思うんです。これとのたたかいが、日本における、大きな、だいじなたたかいだと思うんです。

それとたたかうためには、どういうふうな理想をもったらいいかというと、ちょうど地獄の底から、天国をのぞむように、ひとつの理想像を描いて、井戸の底から、星を見るように、星をはげしく見つめなければならぬ。それが含羞の巨人です。それが献身という行動です。そういうものが、いちばん不足している。

斎藤隆介は今私達が戦うべき相手は、プチブル意識だと言う。これが最大のガンで、これが戦うべき敵の正体だという。この敵を打ち負かしさえすれば、荒波など敵ではないのである。

ではこの敵は、はたして強敵なのか否かというところ、八郎が寒風山のプチブルな嘆き等意に介さず、海に放り込むところを見れば、容易に退治することが出来るものと考えていることがわかる。もしプチブル性が容易に克服されないものであれば、小鳥を驚かすことさえしなかった八郎が、いやがる寒風山を海に放り込む筈がないからである。それは又寒風山に対する八郎の態度からも伺える。八郎は佐藤道雅が言ったように、山を非情に扱っているわけではない。それは八郎が死を賭けて海に入っていく時、

「うおーい、さみさみ言^いってた山^{やま}こ、おらも、おめえのとなりさ、行く^よからな！」

と「海さしずめられて、頭だけ出してる」山に向って叫ぶところから推察される。もし八郎が、山を非情に扱い、その嘆きを無視したのなら、自分が死をかけるという非常の場合に、一顧だにする余裕はなかった筈である。八郎が寒風山に向けて発したこの掛け声は、プチブルに終始している者に対する叱咤と激励のメッセージなのである。⑤ 「自分で自分をよわむしだなんて思うな。にんげん、やさしささえあれば、やらなきやならねえことは、キツとやるもんだ。」というメッセージである。

自分を弱虫と思うから何もできないのだ、弱虫と思わなければ、どんなことも出来る。プチブル等もの数ではない、頑張れ、頑張れ、サー、^⑦「お前は立てる。立つてごらん。本気で立とうとしたことがないじゃないか」

私達が今一番戦わなければならない敵は、その気になりさえすれば容易に克服することが出来るものだということである。

ここには斎藤隆介一流の人間観がある。彼が人間を信頼して止まない姿がある。

しかし、人間はそんなに強くあり得るだろうか、人間が、関わり合わなければ生きていかなない存在である以上、「相手を生かすことが自分の生きることにつながる」という原則は容易に導き出されるし、ごく当り前の結論である。

むしろ斎藤の斎藤たる所以は、そういう原則通りの生き方を誰でもできるし、皆がそうしなければならぬという論法にまで昇じた点にある。

古田足日は、^⑧「斎藤隆介は原理を語る。しかし、プロセスは語らない。ぼくは日本の現在の状況を切り開くプロセスが欲しい。」と言ったが、確かに氏の言う通り、人間の限界性を素通りした原理だけが強調されている。

何故そこまで人間の力を信じ切れるのか不思議である。

有史以来、人間は果して何を学んだと言えるだろうか、機械文明は驚くばかりの発達ぶりを見せている。しかし、現在世界の平和を維持しているものが、人間のヒューマニズムではなく、核ミサイル保有量の均衡によるという事実を、どう解釈すればよいのだろうか。それは、人類が、

本来もっているやさしさを立たせていない所以だと言い切ることが出来るだろうか、そんな単純な理論は通用し得ない。

人間は学習によって、人間性を獲得していく存在である。その学習する間に与えられる精神的・物質的環境は、実に複雑で混乱をきわめている。おまけに、学習体得して行く器である人間の脳や肉体ほど不完全性を備えているものもない。こういう存在性をもっているのだから、如何に学び努力したといっても、私達が獲得するものは曖昧模糊として、完全なる普遍性と絶対性を有するものでは断じてあり得ない。つまり真の永遠性（善の形）を有してはいないのである。

学ぶ程に、原則通り正しく生きたいと願う程に、私達がつき当るものは、その原則を全うし得ない人間の有限性の苦である。こういう存在の奥深い所から流れ出する悩み、この罪性と戦ったのが、芥川の『白』『くもの糸』、有島の『溺れかけた兄弟』等一連の作品である。（他にいくらかもある。）

この作品の主人公たちは、自分が死をかけた一瞬に出てくる本能的に身を守ろうとする自己中心性と激しく戦い、悩み抜いた。それに比せば、誠に八郎はいさぎよい。宮川健郎は、^⑨「こうして死んでいく八郎に、人がその現実をこらえるときの葛藤や逡巡の影はない。」というが、正に八郎は人間が元来もつ有限性、その弱さと対面していないし、戦ってもいない。それを見ようともしていない。

「やんなきゃなんねえことがわかっていてもやれねえ」のが人間である。この限界がどこから来るか、原因を八郎は語らない。隆介はすつとばして行く。そこでもたもたする人間は、笑われ、はりとばされてしま

うのである。

寒風山は終生の笑いものになってしまった。寒風山はプチブル性そのものの象徴とすれば、笑われ排されて当然であるが、プチブル性を脱しようとしても、恐怖故に脱しきれない弱さを抱えて、苦悩の下積み生活をする人間が、この作品の中に現われて来ない。何故現われて来ないのかというと、隆介自身が、人間が肉体に起因する限界をもつものであり、肉体を有している限り、どんなにしてもそれを無化することは出来ないものだという、人間存在の本質を素通りしているからである。

斎藤隆介が、原則を全うするために戦った敵の正体は限界性そのものではなく、いわば限界性から由来する影である。しかし、「敵は本能寺にある！」のである。

人間がもつべき本当のやさしさとは、この限界性に注目し、その壁に突き当たって泣き、うちひしがれている相手の弱さ、その痛みや嘆きをあたかも自分のもののように感じて、否、そっくり自分のものとして引き受け、自分の身に負うて戦い、それに勝利して、更にその勝利し得る道をそっと示してやることではあるまいか。

⑩ こういうやさしさを見事に描き出したのが、ミヒヤエル・エンデの『はてしない物語』である。

三、やさしさ

『はてしない物語』の主人公バスチャンは、人の為めなどついぞ考えたこともない、憶病で弱虫で、勉強もできない。おまけに不恰好な少年

である。この彼が、幼なごろの君とファンタージェンと人間界を救うという、恐るべき遠大な使命を与えられるのである。こんなダメ人間にそんなことが果してできるだろうかと不安を抱かせたまま物語りは進められて行く。

バスチャンがその務を果たすためには、どうしても人間界からファンタージェンにやって来て、幼ごろの君に新しい名前をつけなければならない。そのためにはバスチャンをファンタージェンに導いてくる者が必要である。その役を担うのがアトレーユ少年である。

アトレーユは、バスチャンとはうってかわって勇氣と智慧にとみ、狩の技法にもたけた麗しい少年で、ファンタージェンの住人である。彼も⑪「女王幼ごろの君のご健康をとりもどし、同時に、このファンタージェン国を救う方法をさがす」使命を受けて旅に出るが、その旅は、全く想像を絶する波瀾万丈のものであった。なにしろ旅をする条件というのが、アトレーユを全くの窮地に追い込む以外の何ものでもないというしろものだからである。

⑫ 「これより先、そなた自身の考えは意味をもたぬのだから。ゆえに、いかなる武器もたずさえずに出発するのだ。何ごとも起るがままに起こらしめよ。悪も善も、美も醜も、愚も賢も、すべてそなたにとつては区別はないのだぞ、幼ごろの君の前においてはすべてが同じであるようにな。そなたのすべきことは、求め、たずねることのみ。そなた自身の意見にもとづいて判断をくだしてはならぬ。よいか、けっして忘れるでないぞ」

これでは、アトレーユが如何に聡明で、勇敢で、さっそうとしていても何の役にも立たない。バスチャンと全く同じ条件に立たされることになる。

一方、バスチャンは人間界にあつて、このアトレーユ少年の冒険を物語として、学校の屋根裏で読み始める。ファンタージェンと人間界という異次元の世界それぞれに住む二人は、「物語」を媒介にして、ファンタージェンと全人類を救う旅の第一歩を、同時に、同じ条件で踏み出すのである。

アトレーユが、実際に旅の中で遭遇した自分との戦い、そこから誘発されてくる悲しみ、苦しみ、戦い、挫折等、種々の心の文は、アトレーユに何度も死を覚悟させるものであつた。けれども彼は、その一つ一つを具体的に、着実に乗り越えて、ついに幼ごろの君を救う方法を発見するのである。そして報告に行く訳であるが、驚いたことに、幼ごろの君は、アトレーユに命令を出した時から、すでにそれを知っていたというのである。

死ぬほどの思いをし、精魂つかい果してやつと発見した答えなのに、命令を出した本人が、答えを知っていながらわざわざそうしたというのである。「一体何のために？それでは今までの自分のあの死との戦いは何だったのか？」誰でもがそう叫びたくなる。

アトレーユが、旅の中で、常につきつけられた問は、彼自身の知恵や実力の豊かさを計るものではなかった。ただ生命を賭けても惜しくないか、生命を賭けても幼ごろの君とファンタージェンを救いたいのかとい

うものであつた。そういう死をかけた連続的な戦いが、皆無駄だったのである。これを聞いては腹を立てないわけには行かない。

⑳「では、なぜわたしをお遣わしになったのですか？何をわたしに期待しておられたのですか？」

こみあげてくる怒りをぐつとおさえてアトレーユが問い返すと、これ又意外な答えが帰つて来た。

「そなたがしてくれた、そのことをです。」これは一体どういう意味であろうか、幼ごろの君はさらに続ける。

㉑「慰みでしたのではありません、アトレーユ。苦勞をかけたこともよくわかつています。でも、そなたがのりこえなければならなかったこと、あれはみな必要だったのです。そなたを大いなる探索に出したのは、そなたが今報告するつもりだった報せのためではなく、それがわたくしたちの救い手を呼ぶ唯一の方法だったからです。かれはそなたのしてきたことを共に体験し、そなたと共に遠い道程をやってきました。あの奈落の裂け目でそなたがイグラムールにはなしかけたとき、かれの驚きの叫び声が聞こえたでしょう。また、そなたが魔法の鏡の門の前に立ったときは、かれの姿を見たではありませんか。そなたはそのかれの鏡像の中に入ってゆきそれを身につけてしまったのです。だからかれはずっとそなたについてきました。」

そなたの目で自分自身を見たからです。」

幼なごころの君を救う方法ではなく、その救い手を人間界からファンタージェン界につれてくるために、あのアトレーユの死にもものぐるいの旅と体験が必要だったというのである。何故アトレーユの旅が、バスチャンを引き入れる方法になるのかといえば、バスチャンがアトレーユの体験を読むことを通して、バスチャンも同じ体験をしたからである。

アトレーユの悲しみ、苦しみ、戦いは、そのままバスチャンのもの、アトレーユの歩みは即バスチャンのあゆみだったというのである。バスチャンは弱虫で臆病で落第ばうずで「全然いいとこなし」そのうえ時々ひとりごとをいうので馬鹿あつかいされている。全くもってプチュブルの代表的存在である。そういう彼を立ちあがらせ、幼な心とファンタージェンを救うために立ちあがらせるためには、バスチャンと同じ条件に立って、バスチャンと同じ弱さをもって、その一つ一つに勝利して歩を進めて行く人物が必要である。バスチャンのかわりに悪に敵対し、悪を滅ぼしたのでは、バスチャン自信が立ちあがることは出来ない。寒風山のごとくいつまでたってもビービーと泣き、臆病風に吹かれていなければならない。バスチャンの限界性、バスチャンの弱さそのものを背負って戦い、勝利してくれる人が必要だったのである。

では、何故、アトレーユの戦いがバスチャンの弱さと戦うことになったのか、それは、アトレーユの戦いをバスチャンは自ら進んで自分のこととして感じ、考え受け取っていたからである。その間バスチャンも家に帰らず、学校の屋根裏に閉じこもり、その恐怖と戦いながら一人、読

書に耽り、アトレーユと共に戦ったのである。

こうして、アトレーユの勝利は、即バスチャンの勝利となり、アトレーユの一つ一つの行動は、バスチャンを新しく勇気あるものへと変えて行った。

しかし、最後に、本当にこのファンタージェンに入って来るか否かはバスチャンに任されている。その意志決定はバスチャンがしなければならぬ。そしてそれは、決して難しくはないのである。何故ならアトレーユが既に、その弱い意志と戦って勝利したからである。

アトレーユが危険に満ちた冒険をした時、いつも問いかけられたものは、「それでもファンタージェンの救いのために決行するか。」というものであった。それは意志決定の選択を迫られているのである。アトレーユが最終的に勝利したものは、肉体の限界性からくる意志力の弱さである。アトレーユはファンタージェン界に住むものだから、バスチャンと同じ肉体を有してはいなかった。しかしバスチャンの肉体をもっているのと同じ条件に立たされて旅に出たのである。従って、アトレーユの戦ったものは、正にバスチャンの肉の限界性と、そこに起因する意志決定力の弱さである。

アトレーユは、バスチャンの弱さをその身に負って、完全に勝利したのである。あとはその贈りものをそっと差し出して、相手が受け取るのを待つだけである。それを受け取るか否かはバスチャンに任されているのである。

この自由の権限を、幼なごころの君もアトレーユも犯さない。何故なら、もしこの意志決定権を奪い取ってしまうなら、もはやバスチャンは

人間ではなく、ロボットになってしまふからである。

たとえ自分の弱さを皆取り去つてもらつたとしても、その力を受け入れて勇敢に生きるか、拒否してプチブルに安住して生きるかは本人の自由である。そういう自由を与えられることは、人間として認められることであるし、そういう自由を自分で駆使してこそ、人間として振い自己を、生を確立できるのである。それ故、幼ごころの君も、アトレューも、バスチャンが決定を下すまで、何の強制も批難もしない、ただ万事を尽してひたすら待つのである。

ミヒヤエル・エンデは、『はてしない物語』を通して、「人のために」生きるという時、まず人間の本质を見つめ、尊厳性を導き出した上で、こういうやさしさが、自分を、そして個人と全体を生かすと説き明かした。

八郎とアトレューの生き様を通してその優しさを比較する時、実に大きな差が認められる。

本来あるべき「やさしさ」というものは、ひとつしかないのです、悪とたたかえるというものが「やさしさ」であつてね。悪とはたたかえない「やさしさ」なんてのは、敵側がいつている、プチブル的な「やさしさ」であつて、そんなものは「やさしさ」の真実ではないんです。(中略)「やさしさ」だけじゃだめた、なんていう理解は、「やさしさ」といつものを、わかつてないんだと思うんですよ、ほんとの意味での。人民的な意味での理解が、ふじゅうぶんだと思うんですよ。

ここで言われている「悪」は、ミヒヤエル・エンデが導き出した限界性では勿論ない。波に象徴される、人民の生活をおびやかす外敵である。そして、「人民的な意味での理解」とは、人間は一人では生きられない集団の中でのみ生きることが出来る。やさしさは、そういう集団の中で生まれて来るものである。だからやさしさを言う時には個と集団の両者を生かす立場をよく理解して、そういう観点から述べなければならないという意味である。

八郎は、人民をおびやかす波と戦い、プチブル性と戦い、死の恐怖と戦つた。しかし、人間の限界性には目もくれなかつたのである。

その上、誰でも八郎と同じように出来るし、そうしなければならぬという論法に昇じてしまつた。それは人間の意志決定権を無化し、ロボット化してしまうことである。幼ごころの君や、アトレューのように、相手が立ちあがるまでじつと待つことをしない。嫌がる山を無理矢理海に放り込み、寒風山という渾名まで与えて、終世の笑いものにしたのである。

大きくなりたいという願いとやさしさ、それを実行し得る意志の強さは、八郎がもつて生まれた性質である。人間の根源的な悩みは、こういう性質をもっていないところにあるのだが、その点を全て無視して、その気になれば、生の原則を全う出来ると主張する。

この点で、彼は人間を信じ、暖かく見つめ励ましているようにいて、実は冷たくつき放し足下に踏みしだいていのである。それが彼のやさしさの実態である。

どんなに努力しても出来ないことを、出来ると信じて、「生命かけよ」と命じることほど残酷なことはない。励ます方も励まされる方も、真剣であればある程その姿は、何かいいようもない哀れさを呼ぶ。(浪花節・忠臣蔵・演歌等日本人の心情を代表するようなものの根底にながれるある種の哀しさは、これに起因するのではないかと思っている。)

泣き叫ぶわらしこのやさしさにポロリーと一粒、大きな泣をこぼした八郎の、このやさしさが、かくも非情なものを胚胎しているとは認め難い。私達は、誰でもがこういう情の動き、やさしさをもっている。そしてこの感情が人生に社会にうるおいを与えてきたことをよく知っている。だからそれ自体が悪いのでは決していない。それに安住して限界性を見抜かないことが危険なのである。

ミヒヤエル・エンデが提示したやさしさは、日本人、特に儒教、仏教思想を土壌にしている文化圏には生まれにくいものである。エンデのは、明らかに聖書の世界のものである。横谷輝は、八郎の情が「日本人および日本の文化の中核をなしているのである。」と言っているが、当を得ている。

斎藤隆介が民話風創作を始めた理由は、国民文学という、日本人特有の文学を生みだしたいという欲求を基盤にしつつ、社会変革の中の自己変革をめざすところにその発端があった。

⑦今のこの時代に生きているわれわれは、大激動の時代に生きているわけですね。……それで童話を書く時に、やはりばくら現実を正しく書いていく方法が一つと、変革をめざし、それからあり得べき現

実をメルヘンとして描いていくという、革命的ロマンティズムという線が一本入らなければ、日本の国民文学なんていうものは形成されないんじゃないかと思う。

国民文学というものが存在し得るか否かは解らないが、もしあり得るとすれば、日本の独自性を最高に表現したものであつて欲しいと願う。しかし、それが文学作品として世界に通用するためには、人間の本質と尊厳性をもつと真正面にすえて、凝視する必要がある。それを抜きにして、ただ日本人の特徴を描出し、そこに自分の思想を加えて描いただけの作品は、如何にやさしさがあるといえども、革命的ロマンティズムも国民文学も完成させることは出来ない筈である。

四、永遠の生命

八郎の発見した原則、その生き様の実態は素晴らしい。けれども戦った敵は的はずれであつた。

八郎は八郎なりのやさしさをもって、八郎なりの敵に向かつて、人々のために戦い、八郎なりに勝利した。その後獲得したものは果して何であつたろうか。

八郎が生を謳歌しつつ海の中に沈んで行く姿は、いいようもない感動を喚起する。作者はこの時、八郎は、「死ぬんじやなくて喜びの中で永遠に生きる形になる」のではないかという。

八郎は死に勝利したし、八郎の「幸福の段階が一段あがつている」こ

とは間違いない。しかし、それが「永遠に生きる形になる」というのは飛躍である。何故なら、八郎が勝利したものは、死そのものではなく、死の恐怖だからである。

死は、人間の厳粛な宿命であって、これを避け得る人は一人もない。遅かれ早かれ直面せねばならないものである。そして先述したように、この死ぬべき身体が、永遠性を体得させるのをばんでいるのである。

何故なら、私たちの肉体と心は、全く別次元の存在形態をもつものでありながら一致して働く。つまり心を養い育て、形づくって行くものは、ことばだけではなく肉体の言語体験である。それを通さない限り心は養われて行かない。それ故、心の中に形づくられることばは、表面だけを見れば、正しく整っていても、その内実を見れば実に肉体の限界性をそのまま有したものなのである。だから、如何に立派なことばをしゃべったとしても、人間が限界ある、死すべき肉体をもっている限り、その口から語られることばは、必ずや肉体のもつ性質をもっている訳だから限界のあるものである、人間がこの肉体にある限り、どんなに逆立ちしても、永遠性を全うすることは出来ないのである。それが唯一出来るのは、この肉の身体が、永遠に死なない身体をもった時か、肉に支配されない生き方を発見した時のみである。

八郎は死の恐怖に勝利したが、永遠に死なない身体をもって新しい次元の生命に復活した訳ではない。だから、斎藤がどんなに、八郎は永遠に生きていると主張しても、そのことばは実の伴わないものとして空まわりをする。

それで、いまでもおきのほうでは、海はどぴーんどぴーん、あれるのよ。したども、八郎がけつぱってる八郎瀧は波がしずかでよ、八郎が、びゅーっ、びゅーっ、口ぶえふくたんびに、しらほは鹿度の村から脇元の岸さ、すいーっ、すいーっって走るのよ。

これは八郎が海に入って（死んで）後の描写である。これを見ると、八郎は生きているようであるが、その生き様は、全く生前と同じ次元のものである。相変わらず八郎は波と戦っている。その姿は悲愴でさえある。何故こんなにも戦い続けなければならないのかというと、八郎が勝利したものが死の恐怖であって、死そのものではなかったからである。もし八郎が、死そのものに勝利したとすれば、人間の限界性を充分に取り払った訳だから、すでに波を充分に押え切っていなければならない。戦いは一度だけで完成された筈である。八郎に限界性がないのだから、この三次元界の限界性をもつ波に支配される必要がないのである。

しかし、八郎は尚もけつぱり続けている。蜿蜒とけつぱり続ける。否、けつぱり続けなければならない。瞬時でも気をゆるめるなら波は又、村人を襲ってくるからである。

この息の詰まるような戦いに終止符を打つものは、この作品の中には誰も、何もないのである。

この果しなき戦いを直視した時、私達は、眩惑を覚える。
おおよそ

え？ あおとこの男わらしこなんとしたってか？ あおとこの男わらしこは

よ、おつきくなつて、おつきくなつて、ひとのためになった八郎はちろうば
まねてよ、どこかで、おつきくなつて、おつきくなつてゐるもの。

読者よ、おまえも八郎のようになれよ／と作者は励ましたかったのだ
と思うが、ついぞ、そんな気にはなれない。それでなくても道が解らず
に悩み、絶望の淵に沈んでいるプチブル的な人々に、「立ちあがれ／」
そして蜿蜒と果しない戦いにいじめとは言い難い。これでは泣きつ面に
蜂である。この最後の読者への語りかけは、八郎が死の恐怖に勝利した
感動が素晴らしい故に、うっかり見過してしまいがちであるが、実は恐ろ
しい絶望の淵へいざなうことばである。

「人間は、誰でも心に永遠を思う思いをもっている。」という場合、
その意味は、言い換えれば、「人間は誰でも、心に、真実の生き様を示
す原則を知りたいと願ひ、かつ実現したいと願っている。」ということ
が出来る。

八郎が「ゝのため」ということばの中に、種々の意味を込めて発見し
た原則は正しかったけれども、それを実現することは、人間が肉体を有
する限り不可能だということを、作者が見逃した故に、古田足日の言う
ように、「原理だけを語ってプロセスを語らないものに、また、藤田④の
ぼるの言うように、『生き方』はあつても『暮し方』がない』ものに終
つてしまった。実は『プロセス』も『暮し方』も語れないのである。

更に、死の恐怖に勝利すること、死そのものに勝利することを混同
したまま、永遠性を説いた故に、「人のために」という八郎の死が、計
らずも忍従的な自己犠牲、献身に終らせる羽目に陥ってしまったのであ

る。

「わかったあ／」と生の感喜に満ちて叫んだ時点で、獲得したかにみ
えた永遠の生命の実態は、村人をおびやかす波をおさえることはできて
も、村人や寒風山のもつプチブル性を根絶やしにする力はもたなかった。
八郎の死は、八郎個人の死に終つたのであつて、村人や全人類の死を永
遠の生へとつなぐ懸橋とはならなかったのである。八郎と同じ死を選ん
だ時、八郎と同じように生きることができるといふ保証はどこにも無い。
パスチャンは保証されていた。アトレューを信じて立ちあがりさえすれ
ばよかったのである。

しかし、八郎の場合、信じて立ちあがっても、もしかすると、死の恐
怖に挫折したり、発狂したり、ショック死したりするかも知れないので
ある。その危険性は一〇〇％ある。八郎の死に方は、そういう危惧を緊
々と与える。だから大人も子どもも、大部分の読者たちは、「八郎は素
晴しいが自分には出来ない」と告白せざるを得なかったのである。

更に悪いことには、八郎の示した原則が、完全であればあるほど、自
分には出来ないという敗北意識を強烈に植えつけるだけでなく、しやう
ともしない者や、やつても出来ないと言苦悩する者に対して、劣等者とい
う厳しい審判をくだすことになる。また、弱さを常に突き出す、意地悪
くうるさい姑ともなるのである。

斎藤隆介は、永遠性を安易に使い過ぎた。そして、心と身体という異
次元の存在が一体となつて、初めて、人間存在を得ることが出来るとい
う、人間の存在様式と本質を見過して、論理を展開し過ぎた。

ここに彼の論理の飛躍と破綻がある。

こうして、八郎が歓喜の極みで得た永遠性の実態は、存在の本質から外れた、歪んだ形をもつものとなってしまうたのである。

これは隆介一人に限らない、ファンタジーエンと人間界をつなぐ神秘的なドア、永遠の原則を知らない多くの日本人の、哀しい歪でもあろう。

引用文献

- ㉔ 『斎藤隆介全集』「モチモチの木」第一巻、岩崎書店、93 P.
- ㉕ 『日本児童文学』「斎藤隆介の文学と思想」すばる書房、一九七九・二・28 P.
- ㉖ 『日本児童文学別冊』「大っきくなつて、大きくなつて」斎藤隆介、すばる書房、一九七五・一・二〇・132 P.
- ㉗ 『日本児童文学』「斎藤隆介の世界」藤田のぼる、岩崎書店、一九七九・二・36 P.
- ㉘ 『斎藤隆介論』——ベに出しチョンマを中心に——『日本児童文学』一九八二・二・60 P.
- ㉙ 『斎藤隆介全集』第二巻、岩崎書店、一九八二・一・三一・20 P.
- ㉚ 『モチモチの木』『斎藤隆介全集』岩崎書店、一九八二・三。
- ㉛ 『立つてみなさい』斎藤隆介、新日本出版社、一九六九・一〇・三〇・8 P.
- ㉜ 『児童文学の旗』古田足日、理論社、一九七〇・314 P.
- ㉝ 『叙事』の方へ——斎藤隆介に関する十八章『日本児童文学』一九七九・二
- ㉞ 『はてしない物語』ミヒヤエル・エンデ、岩波書店、一九八二・六・七 62 P.
- ㉟ 『はてしない物語』ミヒヤエル・エンデ、岩波書店、一九八二・六・七 62 P.
- ㊱ 『はてしない物語』ミヒヤエル・エンデ、岩波書店、一九八二・六・七 234 P.
- ㊲ 『斎藤隆介全集』第一巻、岩崎書店、一九八二・一・三一・202 P.

- ㉞ 『日本児童文学』、「日本人の意識と児童文学」、一九七四・294 P.
- ㉟ 『日本児童文学』、「創作民話の問題をめぐって」、27 P.

- ㊱ 『斎藤隆介全集』第二巻、岩崎書店、200 P.

- ㊲ 『日本児童文学』、「斎藤隆介の世界」藤田のぼる、岩崎書店、一九七九・二・37 P.

- ㊳ 『はてしない物語』ミヒヤエル・エンデ、岩波書店、一九八二・六・七・586 P.

原稿受理一九八五年四月三十日